

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	『チーム在宅』が上伊那地域ネットワークの中心をめざして
演者名	白鳥忍 1)、福富みずほ、唐沢一夫、唐澤美奈 2)
所属	1) 上伊那生協病院附属診療所 2) 訪問看護ステーションみどり

(はじめに)

当法人は病院、診療所、在宅療養診療所、老健、訪問看護、グループホーム、通所リハ等 16 の介護事業所を上伊那郡内に展開する医療・介護の複合体である。法人内を地域ブロックに分け運営を行い、私達在宅ブロックは強化型診療所を中心に、訪問看護介護、通所介護、小規模多機能、グループホーム、ケアプラン事業を行い、連携して『チーム在宅』を形成している。利用者を共有している場合が多く、チーム強化のため、実践の振り返りと職員育成を目的に、困難事例や死亡事例の検討を行う『在宅学術交流会』を行っている。この交流会により、強化されてきたチームの実践を報告する。

(経過及び結果)

2010 年 4 月第 1 回開催、以後 3 か月毎継続し 15 回開催した。事例検討、実践報告を通して在宅療養にかかわる多くの職種が交流し、事業内容、職種が違っても、患者に寄り添う思いを一致させた。症例検討を通して、倫理観・死生観を学び、患者に関わる姿勢・視点に変化が見られた。在宅医学会大会参加の学びから、TTC (とことんケア) の実践、NNT (なにが何でも食べさせたい) を立ちあげ、経口摂取を迫及し成果が見られている。地域で医療・介護・福祉の充実、安全・安心を守り、患者を支えるために私たちが『走る広告塔』としてウイングを広げ、地域の基幹病院、施設へ参加を呼びかけ、参加者を集い学習・交流の場になっている。

(まとめ)

各職種の視点や思いを共有することで、ネットワークで患者を支える連携強化、職員の力量上昇、倫理観・死生観の獲得に繋がった。継続し開催する事で、この交流会が日常の振り返りと明日以降への結節点であることが定着した。一緒に関わった事例を法人内外の事業者と共有することで、私達の目指す医療・福祉活動も広がっている。今後も『チーム在宅』が在宅療養を支える上伊那地域のネットワークの中心になるよう活動していきたい。